

平成9年6月
10巻2号

日本口腔 インプラント学会誌

Journal of Japanese Society of Oral Implantology

日口腔インプラント誌

J. Jpn. Soc. Oral Implant.

ISSN 0914-6695

1997

日本口腔インプラント学会

C-5. 洞底骨造成術における骨造成の 実験的研究

実験2：洞粘膜挙上空隙への Bone ject™ の補填

(鶴見大歯・口外)

日高 豊彦, 清水 治彦, 岩野 清史
中尾 泉, 渡辺 孝夫, 瀬戸 暁一

洞底骨造成術 (SSA) における有用な補填材を探る目的で今回、イヌ前頭洞に SSA およびインプラント (プロネマルク, ノーベルバイオケア) 植立を施し、洞粘膜挙上後の空隙に Bone ject™ (BJ, 高研) を填塞、術後1カ月屠殺、組織学的に検索した。

方法：実験動物として成犬2匹使用、手術は実験1に準じて行った。補填材は実験側として右前頭洞に BJ, 対照として左前頭洞に TBC (true bone ceramic, 高研) を填塞した。組織学的観察：術後1カ月屠殺、通法のごとく脱灰標本作製、HE 重染色を施し、インプラントに近いところの前額断、剖面を光顕にて観察した。

結果：BJ 群では新生骨は洞壁より増殖する層板構造のみられない細い梁状の骨として、さらに洞壁に近い一部の顆粒表面に類骨様構造としてみられた。対照とした TBC 群では、新生骨は洞壁および洞壁に近いところの TBC 顆粒表面にみられた。2例いずれも組織標本上に押し入れた骨片がみられたが、うち1例は骨片表面および骨片に近いところの顆粒表面に新生骨がみられた。他の1例では骨片が洞粘膜から遊離して埋入した。この例では骨片周囲に新生骨はみられなかった。

考察および結語：BJ は牛焼成骨である TBC と 2% アテロコラーゲンゲルの合材で、TBC はハイドロキシアパタイトとして考えられている。今回の観察では BJ, TBC 群いずれも組織学的構造は類似していた。新生骨は洞壁および洞壁に近いところの顆粒表面、さらに洞粘膜とともに挙上した骨片の表面および、それに近いところの顆粒表面にみられた。術後1カ月の時期の骨形成状況は、実験1で示された補填材を使用しなかったものと比較し優れていたとはいえなかった。